

「なぜ今、『カネミ油症』なのか」

明石昇二郎

(2010年3月15日、「カネミ油症被害者の救済を求めて 小倉集会(福岡県北九州市)」での講演)

皆さんの中には、事件から四〇年も過ぎた今になってなぜ、カネミ油症が改めて注目されているのか、不思議に思っている方も多いのではないのでしょうか。

当たり前のことではありますが、何のきっかけもないところから突然、話が湧いてくるようなことはありません。カネミ油症事件が今再び注目されるようになったことの背景には、政治、法律、科学、報道、そしてなにより被害者自身の活動など、さまざまな分野の方々の努力や苦労があり、その結果として、今があるのだと思います。決して誰か一人の力だけで、世の注目が集まるようになることなどはありえないでしょう。

今日はその「種明かし」をせよとのご指示がありまして、私のわかる範囲で、お話しさせていただきますと思います。

私はルポライターという仕事をしております。ベストセラーとはおよそ縁のないような、地味なテーマや難解なテーマを扱った本ばかりをこの二〇年来、好んで書き続けております。

私が「カネミ油症」の問題に関わることになるきっかけは、一九九八年二月、東京にあります「ふゅーじょんぷろだくと」という小さな出版社の社長から、

「ヒトと『環境ホルモン』の問題をルポ(現地報告)してほしい」

との依頼を受けたことでした。

この頃の私は、原子力発電所が抱えるさまざまな問題をルポし続け、電力会社さんからはそれこそ蛇蝎のごとく嫌われていた頃でありまして、三六歳なのにまだ血の気の多いケンカ屋ライターをやっていた時期でもありません。

社長は、環境問題を主に扱う新雑誌の創刊を考えているとのこと、その企画の柱に、当時世間を騒がしていた「環境ホルモン」問

題が据えられていたのです。

そこで私は、関連図書を読みあさり始め、世界的なベストセラーとなった『奪われし未来』(翔泳社)の著者たちが住むアメリカと、

世界最悪のPCB汚染に晒されているとの情報があった北極圏のグリーンランドを、取材先として提案したのでした。

すべては諸説乱れ飛ぶ「環境ホルモン」問題の真偽を見極めるためであり、そのためには実際に最前線の現場に足を運んでしまうのが一番だと判断したからに他なりません。また、それが「現地報告」というものだからです。しかし社長は、この途轍もない「大型取材企画」に難色を示すどころか、

「コトの本質を見極めるためなら、カネはいくら使っても構わない」

と、ゴーサインを出してくれたのでした。その後、私は地球を二周するくらい飛行機に乗り、その旅の果てに、カネミ油症事件の被害者たちが世界最悪の「環境ホルモン」被害

者であるという事実にとどり着き、愕然としたのでした。その旅の軌跡は、二〇〇二年に上梓した『黒い赤ちゃん——カネミ油症三四年の空白』(講談社)で報告しております。

取材を終え、日本に戻った私は、記事執筆のための資料整理に追われていました。その時、一つの資料が目にとまったのです。

それは、グリーンランドに渡る前に立ち寄ったデンマークで会った、デンマーク国立コペンハーゲン大学のニルス・スキヤケベク教授が、帰りがけに

「これはきつと参考になるはずだよ」

と言ってくれたものでした。スキヤケベク教授とは、九一年に世界に先駆けて、ヒトの精子数が激減している事実を発見した科学者です。その彼がくれた資料——米国立環境衛生科学研究所発行の医学誌『エンヴァイロメンタル・ヘルス・パス・ペクティブス』九六年八月増刊号——の中に、次のような記述がありました。

「……例として、米国やヨーロッパの国々でのDES（合成女性ホルモン剤の「ジ・エチル・スチルベストール」）治療や、日本や台湾でのPCBやPCDFによる食品汚染がある。これらの状況は（人体実験ができない代わりの）実際の実験モデルとして、（被害を受けた）母親の子供に関するデータの収集にできるだけの努力をするべきである……」

この中に書かれている「日本での食品汚染」とは、まさに一九六八年に日本で起きた「カネミ油症」事件のことです。何ということか、海外の科学者たちは、カネミ油症事件とは事実上の「環境ホルモン人体実験」であり、カネミ油症事件被害者の「次世代」に着目せよ——と言っていたのです。

よりによって、自分の足元にある日本に、「環境ホルモン」汚染の「世界最悪の現場」があるうとは、夢にも思いませんでした。この時、日本国内では完全に忘れ去られていたカネミ油症でしたが、世界は忘れどころか、注目さえしていたのです。

世界最悪のPCB汚染に晒されているグリーンランドのイヌイットたちが、「環境ホルモンの姿」を日々、摂取し続ける私たちの「近未来の姿」であるとすれば、今から四二年前にPCBとPCDFという「環境ホルモン」に冒されたカネミ油症事件の被害者たちは、「環境ホルモン」を摂り続けた結果、病を発症してしまっただけで、近未来の先の未来の私たちの姿だと言えるでしょう。

カネミ油症事件発生当時、私は六歳でした。とはいえ、被害者たちから「黒い赤ちゃん」が生まれたというニュースのことは、なぜか鮮明に記憶しております。それなのに、海外の人々から日本の話を教えてもらうことになつて、自分の至らなさと想像力のなさを恥じたものです。

この当時、カネミ油症事件を覚えていた方なら、その病因物質がPCBであることくらいは知っていたことでしょう。しかし、病因物質にはPCDFまで含まれていたことまで知っている人となると、その数は極端に減ります。そして、カネミ油症事件の被害者たちが今、どうなっているのかを知っている人に

及んでは、当事者である被害者本人以外、誰もいませんでした。

当時流行りの「環境ホルモン」問題を扱った本の中では、

「カネミ油症事件の原因物質はポリ塩化ジベンゾフラン（PCDF）とコプラナーPCB」などと、まるで分かりきった話であるかのように書かれていました。でも、被害者の「今」について言及しているものは、何一つありませんでした。どの本の著者も、被害者たちの現状を取材すらしていなかったのです。研究者も研究者なら、ジャーナリストもジャーナリストでした。

本当の取材は、ここから始まりました。

被害者を診察した研究者たちが書いた学術論文や被害者たちの証言により、カネミ油症事件被害者たちの間では「黒い赤ちゃん」の誕生やガンの多発以外にも、次のような「奇妙な病氣」の数々が発生していることがわかりました。

- ① 肛門の開いていない子供の誕生
- ② 親指の付け根に「六本目の指」を持って生まれてくる「多指」
- ③ 生理不順や性ホルモンの減少など、女性の機能障害
- ④ ペニスの奇形に代表される症状の「副腎性器症候群」

人に言えない悩みばかりを抱えて生きていく——。それが「カネミ油症」の実態でした。世代を越えて健康被害が広がっているのは、もはや否定しようがない事実だったのです。

しかし、たとえ事実とはいえ、これほど惨い話を公おおやけにすることが、果たして被害者たちを救うことになるのか、私には全く自信がありませんでした。第一、この話を記事にすれば、新たな被害者差別を生み出してしまう恐れさえあったからです。いっそのこと、取材を中止してしまおうか——と考えたことも、幾度もありました。

つまり、カネミ油症事件とは「書けないほ

ど残酷な悲劇」なのでした。それと同時に、取材記者である私にまで試練を強いるものでもありました。「苦行」に近いものだったかも知れません。拙著『黒い赤ちゃん』の中でも正直に告白しているのですが、書くこと自体を躊躇ちゅうちゅうしてしまうほどの辛い悲劇に遭遇したのは、この時点ですでに十数年、ルポライターという仕事をやってきた私にとっても初めての体験でした。

しかし、そんな意気地いけちのない私を励まし、勇気づけてくれた上に、この悲劇の実態を執筆するよう強く勧めてくれたのは、当のカネミ油症事件の被害者でした。

それが、今日も会場にいらしている矢野忠義さんと、一昨年にお亡くなりになった矢野トヨコさんご夫妻です。私の取材を歓迎してくれたのは、お二人が初めてでした。それまでは、

「もう、そっとしておいてほしい」

と、取材を断る方々ばかりだったのです。初めてお会いした時、矢野トヨコさんは怒りを込め、こう語ってくれました。

「何である時、油症患者が言っていたことを、国や学者は真剣に取り上げてくれなかったんやろう思うて、腹が立って腹が立ってしょうがないき……。あの時、私は肛門の開いてない子供が生まれていることも言った。それから乳ガンのことも言った。ホルモンが冒されていることも言ったし、いろんなことをずいぶん言った。それなのに、相手にされなかった。あの時、もっと真剣に油症患者の言っていたことを取り上げてくれとつたならば、日本の国がかくも無惨に汚染されずに済んだんではなからうか。しかしそのことを伏せるために今、国が何て言ってるかいうたら、油症患者に『銭を返せ』としか言っていないでしょうて……」

私は、油症の患者たちのホルモンがおかしくなっているということ、三〇年前から言ってきたんです。でも、学者も新聞記者もみんな耳を傾けてくれなかった。三〇年経って、やっとこの件であなたたちが取材にきてくれたんですね」

そんなトヨコさんの話を聞いて、私は不覚にも、涙がこぼれそうになりました。

記事を書くことが、被害者差別への新たな引き金を引く恐れは拭いきれないままでした。でも、あとは自分の筆力と、読者を信じるしかありませんでした。

「環境ホルモン」取材に取りかかってから、記事の執筆・発表に至るまでに、実は一〇か月ほどをかけております。

こうした悪戦苦闘の結果、ようやく書けた『地球のーと』の記事に対する最初のリアクションが、今日、司会を務めていらつしやるYSC（カネミ油症被害者支援センター）事務局長の藤原寿和さんからのお手紙でした。

なんでも藤原さんも私と同様、先ほど紹介しました矢野トヨコさんの言葉に「頭をガーンと打たれたような衝撃を受けた」のだそうです。

その藤原さんと、矢野夫妻を初めて引き合わせたのは、一九九九年五月のゴールデンウィークのことでした。その際、藤原さんは唐突にこんな話を切り出したのです。

「実は、今年の九月、イタリアのベネチアでダイオキシン問題の国際会議が開かれるんです。一緒にイタリアに行って、油症被害の現状を世界に向けてアピールしてきませんか？」

これを聞き、私は面食らいました。「イタリアへの旅」の目的は、以下の通りです。

①カネミ油症事件は「過去の出来事」ではなく、現在も続くダイオキシン汚染の悲しい実例である。そのことを、被害者自身の手で世界に向けてアピールする。

②イタリア国内にも「ダイオキシン汚染の被害者」がいる。一九七六年にミラノ郊外の町・セベソで発生した農薬工場爆発事故で、空から降ってきた大量のダイオキシンを浴びていた住民たちがいた。この被害者たちと会い、世界各国の「ダイオキシン汚染被害者」が手を結ぶ第一歩とする――。

というものです。「目的」は大変よく理解で

きます。ですが、何よりもお二人の体調が心配でした。普通の体ではないからです。しかし、矢野さんご夫妻は「自腹を切っても行ってみよう」と、突然降って湧いたような話に大乗り気です。引き合わせたのが私である手前、私もイタリアに同行せざるを得なくなっていました。

実際、イタリアに行くとなれば、まず問題となるのが、二人の旅費をどうするのか——ということ。これは、現在のYSCの前身であるNPOさんがカンパで捻出することになりました。些少ながら、私もカンパしております。しかし、航空券の購入期限までに目標のカンパ額が集まらず、私の連れ合いの経営する会社から「緊急融資」してもらい、なんとか工面しました。従いまして、私はカミさんに今も頭が上がりぬ次第です。

この旅の一部始終は、『週刊現代』という雑誌で二週にわたって発表致しました。

実は、複数のテレビのニュース番組にも、この「イタリアの旅」への同行取材を持ちかけてみました。しかし、すべて断られております。ある民放テレビの有名プロデューサーさんからは、こんなことを言われました。

「興味がないわけじゃない。しかし、専門家ばかりが集まる国際会議に、一般人である被害者が出席したところで、一体何ができるというのか。どうせ何もできない。かつて、日本の公害病患者たちがヨーロッパの国際会議に出席したことがあったが、何もできずに帰ってきた。どうせ今回もそうなるだろう。そんなものをわざわざ取材しても意味がない。第一、油症の健康被害が陰部にまで及んでいたとして、それをテレビでどう表現しろというのか。たとえ取材できたとしても、放送できっこない」

ようするに、カネミ油症事件はテレビ向きではない——というのです。このやろう、今に見ていろよ、と思いました。

大変頭にくてしまいました。私はこの民放とは事実上、縁を切り、その数年後、私は別の放送局（日本テレビというところですが）のニュース番組で、カネミ油症の特集企画を何度も何度もキャンペーンのように放送し続

けることになるのですが、その理由を簡単に説明しますと、

「どう表現しろというのか」

と聞き直るテレビ局の皆さんのために、「カネミ油症はこうやって表現するといいいですよ」

と、お手本を示す必要があったわけです。はじめは、そんなことまで考えなければならなかったわけです。

しかし、テレビ業界にもジャーナリズムとしての良心はありまして、そんな私のワガママに対し、徹底的に付き合ってくれたテレビ局員やディレクター、カメラマン、編集マンがいたからこそ、番組も作れたわけです。

そのうちの一人のディレクターは、過労のため、三九歳の若さですでにこの世を去っております。三上済君とわおと言います。しかし、彼

がいなければ、カネミ油症が今のように注目を集めるようになることもなかったわけです。あの一連の番組は、彼でなければ作れない番組でした。三上君とは、

「いつかテレビも、ダイオキシンの汚染事件としての『カネミ油症』の問題を無視できなくなる日がきつと来る」

と、よく話しておりました。誰一人欠けても、世の注目がここまで集まるようになることなど、決してなかったと思います。

それはともかく、矢野夫妻のイタリア訪問では、セベソのダイオキシン被害者との意見交換や、イタリアの報道各社を前に、ベネチアで二人の記者会見が開かれるなど、大きな成果を収めました。また、ダイオキシン国際会議の会場では、

「今、この会場に、日本から二人の油症患者が来ています」

と、矢野夫妻が紹介され、会場は拍手で二人の来訪を歓迎してくれました。本当は、「ダイオキシン」を看板に掲げるこの会議の主役でありながら、これまで出席することのなかったダイオキシン被害者が、敬意をもって迎え入れられた瞬間でもありました。

この「イタリアの旅」の成功を受け、YS

C(カネミ油症被害者支援センター)が結成されたのは、二〇〇二年六月のことです。

YSCのこれまでの活動により、油症被害者が手にした特筆すべき成果は、

①各地で行なった「自主検診」の結果、油症による健康被害が今なお続いていることを明らかにし、国や油症治療研究班が主張していた「すでに油症の症状は収まりつつある」との認識を改めさせた。

②政府や国会に働きかけ、油症が「ダイオキシン被害」であることを念頭においた油症診断基準の見直しを実現させた。

③国が油症被害者側にいったん支払った損害賠償仮払金の返還を巡り、油症被害者の間に自殺や離婚まで引き起こした、いわゆる「仮払金」問題で、国に請求を放棄させるべく活動を展開し、仮払金計約一七億円の返還を国が免除し、事実上、この問題に決着をつける「カネミ油症特例法」の成立に寄与した。

という二つのことでしょう。

ですが、まだまだ課題は山積したままです。

例えば、被害者二世や三世の「被害認定」問題や救済策です。まさか、四〇年前に作られた被害者一世の時代の「診断基準」で被害認定を行なっていくわけにはいかないでしょうし、そんな認定作業はとも「科学」の名に値しないものです。被害者一世たちの症状と、二世や三世の症状は明らかに異なっているのですから、そのためにはまず、二世、三世の健康実態調査が実施され、その上で、二世や三世のための救済策が講じられなければなりません。

悲惨な症状に見舞われる事実を前に泣き寝入りし、何も語ろうとはしない限り、カネミ油症の現実にも気づくことはありません。

私がカネミ油症取材に取り掛かった一九九八年春、被害者からは取材拒否を受け続け、福岡の中洲で酒を痛飲する日々が続きました。だいたい三か月間くらいだったでしょうか。おかげで中洲の飲み屋さんには大変詳しくなっていました。ここで取材を諦めていたら、カネミ油症に再び注目が集まることも

なかったことを思えば、複雑な心境になります。従いまして、私の取材を根底で支える原動力は「美味しい肴とお酒」なのかもしれません。

マスコミ、あるいはジャーナリズムと言ってもいいかもしれませんが、四〇年前の報道は残念なことに、カネミ油症被害者に真の救済をもたらすことはできませんでした。なにせ、油症の健康被害が子供や孫たちにまで及ぶことになるのは医学の専門家も含め、誰も想像できなかったのですから、報道ばかりを責めることはできません。

しかし、私がカネミ油症の取材に取り掛かった際、一番の壁となったのは、かつての報道記者や記事がカネミ油症をどのように扱い、報道したのか——ということでした。被害者は皆、一様に、報道に対していい印象を持っていなかったのです。当時の報道は、必ずしも被害者を救うものではなく、健康被害の異様さをクローズアップするものが主流でした。だから、健康被害に加え、報道被害にまであう被害者も少なからずいたわけです。取材に協力しても被害者は何ら救われぬのなら、無理して取材に応じる意味もありません。その後、被害者が泣き寝入りに追い込まれたのは、当時の報道によるところが少なからずあると、私は考えています。

しかし、そんな状況は変わりました。今、報道も政治家も、被害者の味方です。それはすべて、カネミ油症被害者の皆さんが勇気を振り絞り、被害の実情を語り始めたからに他なりません。

私が週刊誌の記事やテレビのニュースでカネミ油症の報道を始めた当初、名前も顔も明らかにして被害の実情を語ってくれたのは、矢野夫妻以外ありませんでした。それが今では、若い世代の被害者までが名前を明かし、被害の実情を次々と語り始めました。だからこそ、今があるわけです。

私たち報道の人間ができることなど、しよせん限られています。今後、被害者救済策がどのようなものになっていくのかは、すべて被害者の皆さんの勇気にかかっています。

ともに頑張っていきましょう。  
ご静聴ありがとうございます。

配信元：ルポルタージュ研究所  
Copyright (C) 明石昇一郎  
URL : <http://www.rupoken.jp/>